

教宣 せぶん

プロの目

恥ずかしながら露口証言を聞いていて知らなかったことがありました。「そうだったのか」と思ったことがありました。それは、会社が第3期募集を実施した理由です。てっきり第三者機関である東京都労働委員会の「転進支援策について両組合員とも平等に扱わなければならない」という是正勧告に従ったから行なわれたものと思っていましたが、露口証言はそれを真っ向から否定しました。「東京都労働委員会の実行確保の勧告は応じられないと答えた」と自信満々に証言しました。私たちの代理人の先生の「尊重したと言いませんでしたっけ？」の問いにも、「尊重するが応じられないと答えた」と再度否定しました。そして「ではなぜ第3期募集を行なったのか」の問いには「東海労組から要求があったからです」と証言しました。東海労組からの転進者は一人だったことを指摘されると「それは後でわかったこと」と述べたのです。

露口証言に基づけば、私たちに転進支援策を撤回したことを私たちが「組合差別だ」と東京都労働委員会に申し立てしなくても、時が経って東海労組が要求すれば実現したことになります。ホントでしょうか？

しかし、逆に言えば、そういった第三者機関の勧告でさえ、この東京海上日動火災という会社は「従わない」「無視をする」という体質がある、自分たちが正しいと思う企業論理に従業員のみならず第三者機関にさえ抗弁してくる体質を持っている、何よりも経営のメンツを大切にしている会社である、ということ、裁判官の前で堂々と証言したことにもなります。また、労使が一体となって一方の組合だけ差別しようとしているという一面も、この証言によって明らかになったのではないのでしょうか。

どんなに言い繕っても、どんなに抜け道をつくっても、どんなに小手先の技術を駆使しても、事実を一つひとつ積み重ねていけば、何が真実なのかは自ずと見えてくるものです。私たちも保険募集のプロと呼ばれています。顧客と接していれば、その方が本当に保険を必要としているのか、冷やかしのなのかはわかります。長い間お客さんと付き合いがあればどういう価値観の持ち主なのかも理解できてきます。人事企画部の方たちも人事のプロなら、うわべだけの言葉や行動だけで人物の評価を下さないはずで、誠に僭越ですが、私たちの訴訟を裁いてくれる裁判官もその道のプロのはずです。いままで裁いてきた経験を通して、何が真実で、何がこじつけなのか、判らないわけがありません。

この訴訟がシロクロをはっきりさせることが難しい裁判でないことは回を重ねるごとに素人でもわかってきました。「負けるはずがない」という確信が深まっています。